

Drafted pattern と Commercial pattern の 比較研究 (第4報)

スカートにおける体型別適合度

後藤喜恵・古川智恵子・加藤恵子
松井章子・久田はるみ

Comparative Study of Drafted pattern and Commercial pattern (Part 4)

Fitness of skirt by the type of body

by

Y. GOTŌ, C. FURUKAWA, K. KATŌ
A. MATSUI and H. HISADA

緒 言

第3報の資料をもとに、今回は、体型の異なる学生を被験者とし、Drafted pattern においては、より良き作図追求への資料を、また Commercial pattern においては、より適合性の高いパターン選択のめやすを得るため、スカートについて体型別に比較検討をし、今後の洋裁教育への基礎資料にする事を目的とした。

方 法

実験方法

本学短期大学家政科学生を対象に、表1の内容について行なった。

結果および考察

I Drafted pattern 作図

家政科学生の、教材スカートの作図を図1に示した。丈は各自の膝蓋骨中点として採寸し、 $\frac{\text{ベルト幅}}{2}$ を減じたものとする。幅は前中心より後中心を $\frac{H+4}{2}$ に設定し、脇線はその $\frac{1}{2}$ を中心とした。Hラインは前Wライン直角に実測値をとった。

まず脇カット量を中心より左右にとり、その量は正常体型は3cm、ずん胴体型は2.5cm、胴くびれ体型は3.5cmとし、中間体型は上記3体型に近い方に脇カット寸法をとった。

表1 実験方法

項目	パターン	D. P.	C. P.
調査年月日		47年10月	47年9月
調査対象		本学学生 226名	
実験材料名		D. P.使用 スカート	各社パターン11 種使用スカート
素 材		デニム 使用	
デ ザ イ ン		ベルト付きセミ タイトスカート	ミニ・ヒップボ ーンスカート

図のように描き、今回はセミタイトスカートとしたので、Hラインより10cm下で1cmずつ交叉させ、Hラインの中心と結び裾幅とした。なおWサイズの算出法は $\frac{W}{4} + 0.5 + 0.5 - 1$ (後身頃), $\frac{W}{4} + 0.5 + 0.5 + 1$ (前身頃)とし、それぞれの0.5cmは、いせこみ分量及びゆとり量であり、1cmは、Wラインの前後の差である。

II 各社 Commercial pattern の比較

1) Commercial pattern の使用率

今回学生の任意使用によるC. P.出現率を図2でみると、学生層に最も愛読されている附録パターンのO社が36.6%と約1/3を占めた。これは、第2報で報告した知名度とも一致した。次いで市販パターンのA社で14.5%、B・C社の13.6%の順にみられた。

2) 各社パターン部位別実測サイズ比較

表2のように、C. P.を使用する場合、表示サイズによって選択するが、選択のめやすは、H・Wサイズの他にヒップゆりみとHラインの位置であると思う。しかし、ゆりみやHラインについては各社共表示は不明確である。そこで表2に示すように各社の重立ったものをとりあげ、聞きとり調査によって得た資料をもとにして各部位を平面的に実測して

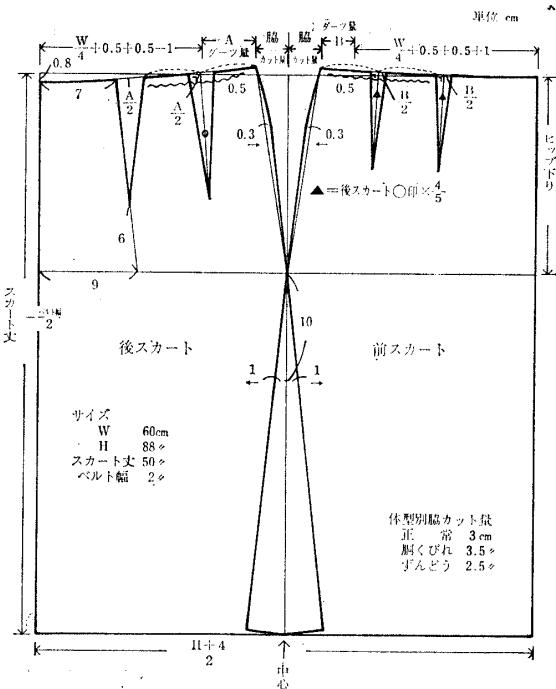


図1 D. P. 作図

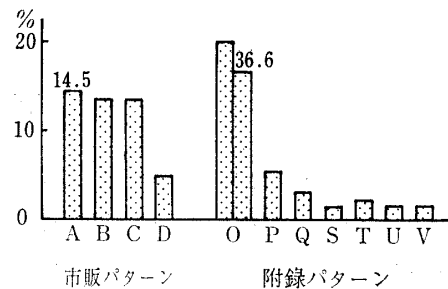


図2 C. P. の使用率

表2 各社パターン部位別実測サイズ比較

単位cm

パターン	前後の差	H. L. の 設定	H ゆ り み		W くり 寸 法		W いせ込み	ダーツ 本 数
			表 示	実 測	前	後		
A	0	前後W. L. から18下る	4	4	0.6	2.0	0.5	2
B	前1.5広	立 体 裁 断	6	4	1.7	2.0		1
C	後0.8広	前Wより18下を直角	4~5	3.6	1.8	2.6		1
D	前 1 広	1) 脇明止り 2) 拡大, 縮小案内印	4~6	2.8	0.5	1.6		2
E	前2.4広	前後WよりH下りをとる	4	3.6	1.3	1.8		2

みた。H. L. の位置は各社およそ18cm位に設定されているが、立体裁断のため明確でないものもある。Hゆりみは、表示では各社4cm~6cmになっているが実測ではA社のみが表示通りで、他は表示より不足していた。前後の差、Wくり寸法についても、これらによって着装感、適合度も相当左右されるものと考え、各社まちまちで一致点は見い出せない。

ダーツについても同様であった。

III Pattern making の時間計測

1) Drafted pattern と Commercial pattern の写しの時間比較及びパターン別写しの時間

図3は、D. P. と C. P. の写しに要する時間を比較し、さらに各々のパターン別写しの時間を比較検討した結果である。

D. P. と C. P. との全体の平均を比べてみると、D. P. 58.3分、C. P. 31.9分と、C. P. の方はD. P. の約1/2の時間で良いことが明らかにされた。これは当然の結果であるが、写す作業と各自割り出して製図することとの差と思われる。さらにD. P., C. P. の最短時間と最長時間をみると、D. P. の最長は73分であるのに対し、C. P. は92.5分もかかり予想と逆の結果が出ているが、これはC. P. のうちの附録パターンの中には、内容が非常に複雑であり、写し難いパターンがあったため、このような結果になったのではないかとと思われる。最短はD. P. 43.7分、C. P. 15.3分となっておりC. P. は約1/2の速さで写されることがわかった。次にC. P. を細かにみると、時間の少ないものから順に、第1位がQの15.3分、次いでV15.5分、D16.5分となり、その他A, P, O, U, B, T, Sの順であり、TとSを除いては全て全体の平均以下の時間で写していることがみられた。最長パターンはSの92.5分であるが、これはパターンの内容が複雑であり、幾種ものスタイルが1枚の用紙に、全て記載されているために、各自選択に時間がかかること、出現がごく低率であること、又被験者の能力にも関係があるとも考えられる。

さらにC. P. を市販と附録パターンとに分けて比べてみると、市販パターンは平均20分の写しに対し、附録パターンは32.2分かかっている。やはり市販パターンは専門家の手によってあらゆる面から研究が重ねられ、どの層の者に対しても使いやすく、わかりやすく、又求めやすく、商品として価値あるものにと考慮されているためではないかと思われる。これに対し、附録パターンは、中には使い易いものもあるが、多くのものは少ないスペースでいかに多くのパターンを載せるかということを考えているため複雑になるものとする。また附録という観点から専門的研究が乏しいことも考えられる。ここが売るための専門的なものと、附録との違いであろう。また、この写しの時間は各パターンの表示方法にも大いに影響があると思われる。

以上のことから、C. P. にも色々問題はあがるが、パターン製作のみについて考えると、D. P. よりC. P. の方が能率的な作業が出来ることが明らかにされた。

2) Drafted pattern の製図時間比較

D. P. 製図時間が、製図に未熟な学生と数多く経験している者との間にどれ位の時間差がみられるかを調べた結果図4のようであった。これは各自の寸法でスカート製図をしたもので、前、後、ベルト及び直しの時間を各々計算したものであるが、まず全体を通してみると学生の製図時間は平均12.5分であるのに対し、経験者においては4.0分と、不慣れた学生は経験者の3倍以上の時間を要していた。これを項目別に分けてみると学生は前5.9分、後4.8分、ベルト

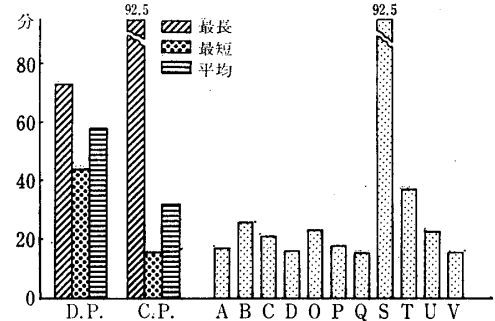


図3 D. P. と C. P. 写しの時間比較及びパターン別写しの時間

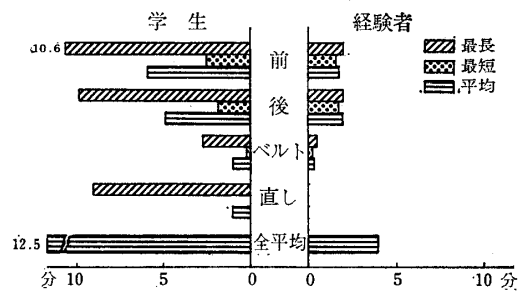


図4 D. P. の製図時間比較

0.9分であり、前スカート製図に比べ後スカートは1.1分も速く出来ている。経験者は前1.8分、後1.9分、ベルト0.29分、直しはなしであり、前後の差はあまりみられなかった。また直しが未熟者にのみあるのも製図時間を増している原因と思われる。

さらにこれを最長と最短の時間でみると、学生では前が最長10.6分もかかっているのに対し、最短2.5分で約1/4で製図が出来ている。後においても最長9.9分に対し1.9分、ベルト2.7分に対し0.2分、直しは8.9分もかかっている者があるのに、中には直しがなくて製図出来る者もいた経験者においては最長、最短差は、ほとんどみられなかった。

このように学生に長短の差が大きくみられるのは、高校でD. P. に慣れている者もあり、大学以前での学校による被服実習の差が、能力差となって現われてきているため、時間差が大きくみられる原因であると考えられる。

IV 体型別適合度

1) Drafted pattern と Commercial pattern の補正率の比較及び体型の割合

D. P. と C. P. の補正有無率、及び体型別割合を図5でみると、D. P. では補正なし16.7%、補正ありは83.3%であり、C. P. においては補正なし29.5%、補正ありは70.5%でC. P. に補正なしの出現率が高くみられたが、どちらも補正ありが高率であった。中でもD. P. に補正ありが高率であるのは、作図上より適合する製図を見つけるため、厳しい目で研究者が仮縫い補正したため、またデザイン的にもベルト付きセミタイトスカートであり、ダーツ等細部の補正を必要としたためと考える。

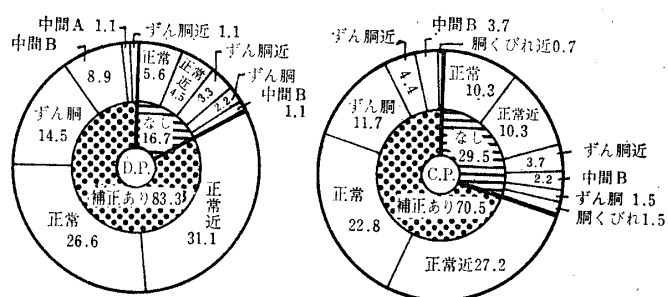


図5 D. P. と C. P. の補正率の比較及び体型の割合

これと反対にC. P. ではD. P. より補正ありが約10%少なくみられたのは、47年9月の実験時点でのデザインは、ミニヒップボーンスカートが最盛期であったため、C. P. にはその傾向が強く出たために学生の使用パターンはこのデザインが多く、D. P. のデザインに比べ、W位置が明確ではなく、また家庭作業としての製作であったため、学生の目で補正をし、D. P. とは補正者が異なることも補正ありがD. P. より少なくみられた原因と思われる。

さらに、この補正の有無を体型別にみると、D. P. は補正なしのうち、正常体型5.6%、正常に近い4.5%、ずん胴に近い順であり、補正ありにおいては正常に近い31.1%、次いで正常26.6%、ずん胴の順であった。またC. P. においては、補正なしのうち、正常、正常に近いが共に10.3%、次いでずん胴に近い3.7%、補正ありでは正常に近い27.2%、正常22.8%、ずん胴11.7%の順であり、D. P.、C. P. 共に同傾向の順位を示した。

2) 時間換算値

表3 時間換算値

補正部位	く		脇ライン		ダ					裾幅	丈
	W. L. 中心	W. L. 位置	W 位置	H 位置	分量	位置	長さ	方向	第1. 第2. 間隔		
換算値	4	4	6	6	7	8	6	8	8	4	2

補正部位には難易度があるので、実験スカートをランダム抽出による10名の被験者に着用させ、時間計測をし、平均値を出し、2回実験してその平均値を補正部位の換算値とした。表3はその一覧である。

3) D. P. の体型別補正の換算時間

表4はD. P. スカート製作被験者90人について補正の有無と、さらにその補正部位を表3によって時間換算した結果である。

表4 Drafted pattern の体型別補正の換算時間

項目	体型	ずん胴	ずん胴近	正 常	正常近	中 間		計	%	%	
						A	B				
人 数		15	4	29	32	1	9	90人			
補 正 な し		2	3	5	4		1	15			
補 正 あ り		13	1	24	28	1	8	75			
補	く	W. L. 中心	8		28	28	4		68分	7.2%	8.5%
		W. L. 脇			8	4			12	1.3	
正	脇	W 位置	24	6	78	72	6	36	222	23.5	42.6
		H 位置	24		72	54	6	24	180	19.1	
部	ダ	分量			7	14		7	28	3.0	37.9
		位置	8		16	8		8	40	4.2	
位	1	長さ	54	6	66	102		6	234	24.8	37.9
		方向			8	16			24	2.5	
位	ツ	第1.第2間隔	8		8	16			32	3.4	9.3
		裾 幅	8		36	32	4	8	88	9.3	
	丈			6	6		4	16	1.7	1.7	
計		134	12	333	352	20	93	944			
平均補正時間		10.3	12.0	13.9	12.6	20.0	11.6	13.3			

A……胴くびれ～正 常

B……正 常～ずん胴

まず被験者を体型別にみると正常に近いが全体の35.6%を占め、次いで正常32.2%でほぼ同率を占めている。

次いでずん胴が16.7%、中間B10%で、ずん胴に近いが4.4%の順で、中間Aは、わずか1名のみ出現であった。なお胴くびれ、胴くびれに近いは全くみられなかった。これらの体型を大きく分けて、正常と正常に近いを合わせると67.8%で全体の半数以上を占め、ずん胴とずん胴に近い者が21.1%で、全体をほとんどの体型で占めていることがわかった。

これら被験者の製作したスカートに補正があるか否かの割合をみたところ、補正なしが16.7%で補正ありの方が83.3%と高率を示している。これを体型と合わせてみると、補正なしの者

は正常体型の者に多く、全体の補正なし15名中5名、次いで正常に近い4名、ずん胴に近い3名の順であった。補正ありは全体からみると正常に近いが28名で最も多く、次いで正常24名、ずん胴13名、中間B 8名、ずん胴に近い、中間Aは1名の順であった。

正常に近いが高順位を示すのは、そこを占める人数が多いためであると考えられる。従って正常、ずん胴も同様のことが言える。

体型別に補正換算時間を出現率の高い順にみると、正常に近いは補正ありの28名中352分であり、中でもダーツの長さが102分で最も多く、次いで脇ラインのW位置72分、H位置54分、裾幅32分、くり、ダーツの方向・間隔・分量の順であった。この体型においてはダーツの長さが最も多く、W、Hのゆるみの補正も多くみられた。

正常体型では333分で脇ラインのW位置78分、次いでH位置72分、ダーツの長さ66分、裾幅36分、その他Wのくり、ダーツ位置・分量・方向などにもわずかにみられ、正常に近い体型と同様な結果がみられた。

ずん胴体型においてはダーツの長さ54分、脇ラインのW・H位置で各々24分、次いで裾幅、Wのくり、ダーツ位置・間隔にわずかにみられ、正常に近いと正常にみられたW脇でのくり、ダーツ分量・方向には出現がみられなかった。

中間体型Bにおいては前の3体型と同様、脇ラインのW位置36分、H位置24分と多くみられた。

中間Aにおいては1名のみの出現であったが、脇ラインと裾幅にわずかにみられた。ずん胴に近い体型についても出現が少ないため、補正は脇ラインのW位置、ダーツの長さのみでみられるのみであった。

次にこれを全体型まとめて補正部位別にみると、脇ライン42.6%、ダーツ37.9%、裾幅、くりの順であった。

今まで述べてきたことから全体型にみてもダーツの長さ、脇ラインW・H位置、裾幅に集中して補正が多くみられ、脇のくり、ダーツ位置・間隔・分量・方向にわずかずつみられた。これは採寸時のW・H位置の設定の仕方あるいは学生にとって初めての教材であるため測り方、その他のテクニックによる寸法の誤差などにも原因していると思われる。

次にこれらを体型別に平均補正時間でみると最も良かったのはずん胴の10.3分、次いで中間Bの11.6分、ずん胴に近いの12.0分であり、予想外に多かったのは正常に近い12.0分、正常の13.9分でずん胴体型に比べ、正常体型に補正の出現が多かった。中間Aは20.0分が多いが、1名のみの出現であるため、このような結果になったものと考えられる。

以上D. P. においては全体型に上記の補正が多いためダーツの長さ、W・Hのゆるみについての再検討を必要と考える。

4) Drafted pattern の体型別適合度順位

表5はD. P. の体型別適合度を順位で表わしたものである。補正無率は高率を適合度1位とし、平均補正時間は、1人当りの割合を示し、低い方を1位とした。

補正無率、平均補正時間は既に表4において考察した通りであるので、ここでは着装評価平均と総合順位結果についてみることにする。

着装評価平均とは、研究者5名があらかじめ設定した減点部位を着装評価の際プリントに記入し、それを換算数値化し、着装評価の平均を出し、体型別にまとめてその平均値を評価点の低い方から1位としたものである。その結果1位が中間Aの10、次いで2位は中間Bの10.4、

3位ずん胴と正常の13.0であり、次いで5位正常に近いでずん胴に近いは最も悪い順位を示した。

このような結果になったのは、補正部位とそれにおける換算値の度合いが異なるため、同じずん胴、ずん胴に近いと、正常、正常に近いであっても、共にそれに近い体型が悪い順位を示した。

また、全体型についていえることは、製作期間が長い

表5 Drafted pattern の体型別適合度順位

項目	体型				中 間	
	ずん胴	ずん胴近	正 常	正常近	A	B
補正無率	13.3	75.0	17.2	12.5	0	11.1
順位	3	1	2	4	6	5
平均補正時間	10.3	12.0	13.9	12.6	20.0	11.6
順位	1	3	5	4	6	2
着装評価平均	13.0	17.3	13.0	15.6	10	10.4
順位	3	6	3	5	1	2
順位計	7	10	10	13	13	9
総順位	1	3	3	5	5	2

ため補正時と着装時の期間のずれ、体型の変化しやすい年齢であることなどの点から、着装評価については、やや問題があると考えられる。

今までの順位を総合してみると、1位がずん胴、2位中間B、3位ずん胴に近いと正常、5位が正常に近い、中間Aの順であった。このことから表4でも同じような結果となったが、正常体型よりずん胴体型の方により適合したパターンであるといえるので、標準体型に合わせたパターンを作図することが目的であるので、今後更に研究の必要があると思われる。

5) 体型別C.P.別補正箇所

体型別、C.P.別に補正箇所の資料を得るために、被験者に各自の製作スカートの補正部位

表6 体型別 Commercial pattern 別補正箇所一覧

体 型	ずん 胴							ずん胴に近い					正 常									
	B	C	D	O	Q	S	T	A	C	D	O	P	Q	A	B	C	D	O	P	T	U	
パ タ ー ン																						
体 型 数	3	3	1	7	2	1	1	2	2	1	4	1	1	7	6	5	2	18	5	1	1	
補 正 な し 数	1	0	0	1	0	0	0	2	0	1	1	1	0	6	2	0	0	6	0	0	0	
補 正 あ り 数	2	3	1	6	2	1	1	0	2	0	3	0	1	1	4	5	2	12	5	1	1	
補 ぐ り	W.L. 中心		2		3		1						1		1		2		3			
	W.L. 脇		1						2		1		1						1			
正 脇 ライン	H				1		1		1										2		1	
	全 体				1						1				1		1		1			
箇 所	ダ ー ツ 幅														1		1					
	ダ ー ツ 長 さ		1												2		1					
所	裾 幅		1		1				1				1		1		5		2		1	
	丈		1		2		1		4		1		2		3		1		3		5	
補 正 箇 所 計	3	6	1	9	2	1	4	0	5	0	4	0	2	1	8	8	3	17	7	2	3	
平均補正箇所	1.5	2.0	1.0	1.5	1.0	1.0	4	0.2	2.5	0.1	3	0.2	0.1	0.2	0.1	2.0	1.6	1.5	1.4	1.4	2.0	3.0

体 型		正 常 に 近 い									胸くび びれ		胸くび れ近い		中 間 B					
		A	B	C	D	O	Q	S	U	V	A	O	P	A	C	D	O	T	V	
パ タ ー ン		7	9	6	1	24	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	
体 型 数		4	1	0	1	6	1	0	0	1	1	1	0	2	1	0	0	0	0	
補 正 な し 数		3	8	6	0	18	0	1	1	0	0	0	1	0	1	1	1	1	1	
補	く り	W.L.中心	1			5											1	1	1	
		W.L.脇	1	4										1		1	1		1	
正	脇ライン	H			3	1														
		全 体				4														
箇	所	ダ ー ツ 幅							1											
		ダ ー ツ 長 さ	1																	
所	裾	幅		2	1	3									1					
		丈	1	5	4	14		1	1				1		1		1			
補 正 箇 所 計		4	11	8	0	27	0	1	2	0	0	0	2	0	3	2	2	1	1	
平均補正箇所		1.3	1.3	1.3	0	1.5	0	1.2	0	0	0	0	2.0	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1	0	

を克明に縮図に記入させ、まとめたものが表6である。体型別、パターン別使用数は、正常に近い体型のOパターンが24名と最も多く、次に正常体型のOパターンの9名の順にみられた。11種中1名のみの使用が9パターンを占めているため、数に差があり体型別にまとめて示したのが表7である。

表7 C.P.体型別補正の換算時間

項 目	体 型		正 常	正常近	胸くび れ	胸くび れ近い	中間B	計	%	%	
	ずん胸	ずん胸 近									
人 数	18	11	45	51	2	1	8	136人			
補 正 な し	2	5	14	14	2	0	3	40			
補 正 あ り	16	6	31	37	0	1	5	96			
補	く り	W.L.中心	24	4	24	24		12	・88分	16.7%	29.9%
		W.L.脇	12	8	8	20		4	12	・64	
正	脇 ライン	H	18		24	24			・66	12.6	22.9
		全 体	6	6	18	24			・54	10.3	
箇	所	ダ ー ツ 幅			14	7			21	4.0	9.7
		ダ ー ツ 長 さ	6		18	6			30	5.7	
所	裾	幅	4	4	40	24		4	・76	14.5	14.5
		丈	18	12	38	52		2	4	・126	24.0
計		88	34	184	181		6	32	525		
平均補正時間		5.5	5.7	5.9	4.8		6.0	6.4			

6) C. P. の体型別補正の換算時間

被験者は136名で、補正あり数は96名、70.5%を占めた。そのうち正常に近い体型が37名と最も多く、次いで正常31名、ずん胴、ずん胴に近い中間B等であった。

補正箇所については、表4の時間換算値にかえ体型別にみると、正常に近い体型では37名の補正者中丈が52分と最も高く、次いでくりのWラインの中心と脇ラインのHと全体が各項目とも24分であった。正常体型では31名の補正者中、裾幅の40分が最も多く、丈の38分、脇ラインの2部位で42分、くりの2部位で32分を占め、ダーツの幅、長さにもみられた。

以上2体型では各部位とも補正がみられ、中でも顕著な差がみられたのは、ダーツの幅と長さで正常に近い体型より正常体型は2倍強多く現われている。ずん胴体型では16名の補正者中くりの2部位で36分と最も高く、次いで脇ラインの24分、丈の18分の順であった。ずん胴に近い体型では6名の補正者中丈とくりの2部位で12分を占め、ダーツの幅・長さには補正がみられなかった。中間体型ではWラインのくりと裾幅と丈にみられた。

一人当たりの補正時間を見ると、正常に近い体型では4.8分と最も少なく、次いでずん胴5.5分、ずん胴に近い5.7分、正常に近い5.9分、胴くびれに近い6.0分、中間B6.4分の順に多くかかっていた。次に補正部位別にみると、Wラインのくりが29.9%を占め、そのうち、中心よりがその半数以上の16.7%であった。次いで丈の24.0%、脇ラインの22.9%でこの3部位で76.8%を占めている。ダーツの幅・長さで9.7%であった。

丈に多く補正がみられたのは、ミニスカートが流行していた時のパターン使用が多く、短く製図されており、スカート製作する時点ではやや丈が長くなりつつある時期であったためと、各自の好みに合わないためこのように多く訂正がみられたものと思う。ダーツの幅・長さには補正が少なかったのは、ヒップボーンであり、ヨーク切替が多く取り入れられていたため、ダーツをたたむことによってウエストラインのくりの変化、脇ラインの訂正に移行されたことや、ヒップサイズにおけるパターンの表示サイズと実測サイズにずれがあり、表示サイズそのまま受け入れて仮縫いした学生においては補正が認められ、前もってパターンを計測して自己サイズに直して使用した者は補正が少なかった。

以上のことから表示サイズには確実性が乏しいのでC. P. 使用の場合にはサイズ確認の指導が必要である。

7) C. P. の体型別適合度

表8 体型別Commercial pattern 適合度順位

体 型	ず ん 胴				ず ん 胴 に 近 い				
	B	C	D	O	A	C	D	O	P
補正なし	33.3	0	14.2	0	100	0	100	25.0	100
順位	1	3	2	3	1	5	1	4	1
平均補正	6.0	6.7	2.0	5.0	0	9.0	0	33.3	0
時間	3	4	1	2	1	4	1	5	1
順位	3	4	1	2	1	4	1	5	1
着装評価	6.0	11.0	6.0	7.1	9.0	5.0	6.0	5.5	4.0
順位	1	4	1	3	5	2	4	2	1
順位計	5	11	4	8	7	11	6	11	3
総順位	2	4	1	3	3	4	2	4	1

体 型	正 常						正 常 に 近 い				
	A	B	C	D	O	P	A	B	C	D	O
補正なし 率	85.7	33.3	0	0	33.3	0	57.1	11.1	0	100	25.0
順位	1	2	4	4	2	4	2	4	5	1	3
平均補正 時間	4.0	8.7	4.8	5.0	5.0	6.4	5.3	4.3	5.0	0	5.0
順位	1	6	4	2	2	5	5	2	3	1	3
着装評価	6.3	10.5	6.8	5.0	7.5	8.4	9.6	6.9	7.8	40	8.0
順位	2	6	3	1	4	5	5	2	3	1	4
順 位 計	4	14	11	7	8	14	12	8	11	3	10
総 順 位	1	5	4	2	3	5	5	2	4	1	3

次にC. P.の適合度を体型別、パターン別に示したのが表8である。体型別に補正無率、平均補正時間及び着装評価は表3の換算値に従い割り出した。評価順位のつけ方は表5と同じ方法である。

対象は、ずん胴、ずん胴に近い、正常、正常に近いの4体型とし、パターンはA, B, C, D, O, Pとし、その他被験者が1~2名と少ないものは考察より除いた。体型別に順位をつけ、順位計を出し、その低い方から1位として示した。

ずん胴体型においてはDパターン、ずん胴に近いではPパターン、正常ではAパターン、正常に近いではDパターンが最も適合性がみられた。以下は表8の順位の通りである。

8) C. P.の適合度総合順位

体型別、C. P.の適合度順位を総括して示したのが表9である。

Dパターンはずん胴、及び正常に近い体型で1位、ずん胴に近いと正常の2体型で2位を示し、総平均順位においても1位であった。即ち、どの体型にも適合性があるとみなされる。次いでA, B, Pパターンであったが体型の適合性順位にむらが見られ、結果的にはDパターンの数値の2倍の不適合度がみられた。

Dパターンは研究開発がなされ、世間的にも知名度が高いことは前報においてすでに明らかであるが、ここにおいてより明確に立証されたものとみなしてよいであろう。

表9 Commercial pattern の適合度総合順位

体 型	各式パターン					
	A	B	C	D	O	P
ずん 胴		2	4	1	3	
ずん 胴 に 近 い	3		4	2	4	1
正 常	1	5	4	2	3	5
正 常 に 近 い	5	2	4	1	3	
計	9	9	16	6	13	6
平 均	3	3	4	1.5	3.2	3
総 平 均 順 位	2	2	6	1	5	2

要 約

D. P.とC. P.のスカートについての実験結果をまとめると

1. 学生のC. P.使用種類は附録パターンのO社のものが最も高く、次いでA, B, C社であった。

2. C.P.のヒップゆるみの表示サイズと実測サイズでは、ほとんどのパターンは実測サイズの方が小さかった。

3. D.P.とC.P.写しの所要時間は、C.P.が約 $\frac{1}{2}$ の時間であった。

4. 学生と経験者の製図時間の比較では、学生は約3倍の時間を要した。

5. 補正の有無と体型の割合では、D.P.及びC.P.ともに補正ありの出現率が高く、体型別割合では両者とも同傾向を示し、正常、正常に近い、ずん胴の3体型がそのほとんどを占めた。

6. 体型別補正箇所ではD.P., C.P.とも出現率の高かった正常、正常に近いに多く、両者とも全体型を通じ共通して補正のみられたのは、W.L.のくり、及び脇ラインで、C.P.ではそれに加えて丈に多く、D.P.ではダーツの長さの高い補正がみられた。

7. C.P.の体型別適合度では、Aは正常、Dは正常に近いとずん胴、Pはずん胴に近いに適合したが、どの体型にも高い適合度を示したのはDパターンであった。

以上、今回の実験はD.P.とC.P.の被験者にスカート製作の経験の相違やC.P.使用の資料数にばらつきがみられたため、正確な数値の把握は困難であった。

48年度は引続き、今回での実験で得たC.P.の体型と適合度の関係を、実験条件を一定にし、再確認すると共に、D.P.では出現率の高い体型に適合度の低い結果がみられたため、特にダーツの長さ、W.L.のくりについては今回の実験資料をもとに今後大いに検討し、D.P.作図設定について更に深く追求し、よりよい被服指導のあり方を探求したい。